

釣れ釣れなるままに

1999年思い出の釣行記 PART. 3

銚子沖少年

鹿島釣狂

釣遊会第3回大会

☆開 健 日	平成11年6月20日
☆開催場所	大船漁港～銚子岬
☆入釣場所	滝ノ沢海岸
☆潮	満潮 20:01 78cm
	干潮 01:32 50cm
	満潮 07:12 80cm
☆釣果	カジカ 347 mm 2
	ハゴトコ 268 mm 3
	重量 205 0g
	合計 821 点
	成績 6 位
	累計点 35 点 (10, 19, 6)

銚子山甲

今回、釣遊会としては初めての釣り場範囲での大会である。もちろん、私にとっても初めてであることには間違いない。私は、この範囲に決まった年度当初から銚子岬に入釣することに決めていた。銚子岬での数々の武勇伝が貴誌の記事にも度々登場し、大物との格闘シーンが紙面を賑わしているのを羨ましく拝読させていただいていた。それは、私の貧弱な道具立てでは銚子岬の魚の強力なファイトに耐え得ることができないのではないかと感じさせるものばかりである。

エサの準備も万全に

エサだけは十分用意した。カツオは12本を捌いて1本から10個とって、全部で120個。エサの必要数は、1本の竿に2個ずつつけて竿3本だから、1回の投竿ごとに6個。1回の投竿に15分要するとして1時間では4回。6個×4回=24個。釣り時間を1時から9時までの8時間として24個×8時間=192個。あと72個足りない。時間にして3時間。この時間は大物と格闘している時間が15分×5本ぐらいいはあるとする。稀に見る大物に足を震わせながら感激の面持ちで眺めている時間もでてくるだろう。あまりの感動に涙する目頭も拭かなければならない。エサの足りない分はその余韻を楽しむ時間と考えて、カツオはそれでよしとする。

桃子岬は遠投すると砂地に届くとある。虫エサも必要である。岩虫と今流行のオランダイソメも用意する。オランダイソメは、柔らかくいかにも魚が食いつきそうである。しかも、針に刺すと長いエサが次から次へと針に食い込み、針からはみ出たしっぽ（しっぽと言うかどうかは分からないが）だけがチョロチョロと元気に動く。遠投にも効きそうだ。まだ使い始めてわずかしかないが、私の愛用する餅の一つとなりそうである。

また、いつものように、暗いうちのカジカ用に必要と考えてイカゴロ60本。マキエもそれなりに準備する。今回、ホッケを必要とする状況にはないと思うが、万が一のため浮釣りの準備とオキアミも用意する。何だかんだでバツカンがエサでパンパンの状態になる。

時計とともに断念

遠く恵山の海を思い浮かべながら当日を迎えた。集合場所に集ってみると皆さんも同じように意気込んでいるのが感じられる。心なしかどなたのリュックもいつもより餅で膨れているようだ。バスがそろそろ来るのではないかと時計を見る。腕に時計がない！時計を忘れた！もう、時計をとりに戻っている余裕はない。途中でコンビニに寄るはずだからそこで購入しよう。最近のコンビニは何でもよくそろっている。時計など千円も出せば手に入る時代だから、餅代に比べるとわずかな出費である。万が一、時計がなくても銚子岬では多くの会員が入釣するはずだから、誰か彼かに時間を開けばよい。

会員のいつもより大きめのバツカンと膨らんだ期待を乗せてバスが出発した。この地区での初めての大会であるため、佐々木秀美氏が海の状況を下見して来て下さっている。バスの中のマイクを通し、彼の解説が始まった。時期、潮、天候を加味しながら、本日のポイントをいくつか紹介していただいた。自分の足と経験から掴んだ取って置きの情報を惜し気もなく披露する彼にはいつも感心させられる。彼のその行為は、自分の釣果よりも釣友の笑顔と会の発展を重視しているように感じさせる。そして本日も、彼の情報を頼りに釣り場に散って行った会員が大きな釣果を収めることとなった。

しかし、彼の解説の中には、いつまでたっても銚子岬が出てこない。しびれを切らした私の質問に彼は答える。

「銚子岬では切り立った断崖の壁に張り付いての釣りになる。潮流が速く、普段、君が使っているような道具立てでは苦戦をしいられる。旧道はついているがその上に崖から崩れてきた大きな岩がゴロゴロしており、『はなえ檣』付近ならともかくその先にたどり着くまでにはかなりの難儀をする。」

そして、何よりも、銚子岬は本日誰も入釣する会員はおらず、時計のこともあり入釣を断念せざるを得なくなった。

滝ノ沢海岸

銚子岬の手前の滝ノ沢トンネル入り口で前野氏が降りるといふ。それで、少しでも桃子岬の雰囲気を楽しむことができるのではないかという思いで前野氏にご同行をお願いする。前野氏が暗いうちに嫁さんのカジカをとるために船揚場の右か左のどちらに入るかと聞いて下さる。どちらでもよい事を告げると、前野氏は右に入るといふことで、私はその左の防潮堤の際に陣取った。長いロープが海に向かって伸びているのに気をつけながらそのロープの左右にソフトボールの1号大のコマセをつけた仕掛けをドボン、ドボン、ドボンと打ち込んだ。間もなく防潮堤のテトラの際に打ち込んだ竿がガタガツとカジカのアタリを伝えてくれ、イカゴロをバックリ唾え込んだ35cmばかりのものが大口を開けて上がった。しばらくは全くアタリがないので前野氏が移動していった。私も白々と夜が明けてきたため辺りの様子を伺うためにぶらぶらする。

船揚場に付いた高い防潮堤に上って見ると、銚子岬から古部港までの海岸線の全貌が眺め渡せた。銚子岬方向に滝ノ沢の低い岩盤が連なっているのが見える。崖下でしかも海面が藍色に染まっていることでその深さを物語っており、いかにも大物が潜んでいるように思われ、移動場所をそこに決める。移動途中の湾洞に子連れ釣り師が入っていたが、私はその湾洞をかわして出岬先端に出た。先端の岩にぶつかり砕けた波が足元を洗い、いわゆる立ち込みとなるが、荷物を親子連れのいる高い岩場において、遠・中・近と投げ分ける。小さなアクリはあるがハゴトコばかりで竿を一気に引き込むようなアタリがない。

釣りきち少年と共に

アタリがないと暇になり、親子連れの様子が気になりだす。父親は自分の竿と子どものものをきっちり区別しているようで、あれこれと手出しするような事はしていない。子どもの方が先程から何度も竿を上げているのだがやはりハゴトコばかりのようであり、父親はそれを温かく見守っている。餅をつけたり、仕掛けを振り込んだり、根がかりを外したりするのは、全て子ども一人にやらせている。

大きな歓声があり振り向くと、その子どもが何やら腰をためて盛んにリールを巻いている。今までのハゴトコとは違い、竿の曲がりも大きく、腰の方から弓なりになっている。さすがに父親の方も近くに駆け寄り大きな声援を送っている。ドタドタドタツと上がってきたのは40cmを優に越えるアブラコである。私も駆け寄り大きな拍手と喝采を送ったが、

少年は鼻をピクピクと膨らませ興奮覚めやらぬ笑顔で応えてくれた。

少年は函館の小学5年生で、何時も父親と共に釣り歩いているが、港の中や砂浜の釣りばかりで岩場での釣りは、今日が初めてとのことである。

感心ばかりはしておれず、自分の釣りに集中する。大物アブラコをと遠投していた竿にようやく大きなアタリが出る。上げて見ると船揚場で上げたものと同じようなカジカである。今度は少年が駆け寄り歓声を上げてくれる。少年よりは遥かに小さな獲物であったが、その気持ちが嬉しく素直に喜びを表す。

その後、ハゴトコのアタリばかりに加えて、先程から時間を確認させてもらっていた親子連れも帰ったので早めに切り上げることにする。私の成績の方はカジカ34.7cm+ハゴトコ26.9cm+重量2050g=821点で5位入賞となった。前野氏は額繁に場所替えをしていたがこれといった獲物がなく、氏にとっては珍しく不調な大会となった。次回の襟裏岬での健闘を誓い合って帰りのバスの中の人となった。

銚子岬での大物アブラコや大物ババガレイとの格闘はこの次の機会のために取っておくことにした。

大会成績

優勝	矢根 政仁	1252点	汀浦
準優勝	佐々木秀美	1169点	ポン木直
3位	廣田 廣一	987点	バンノ沢
身長	矢根 政仁	アブラコ	49.0cm
	佐々木秀美	アブラコ	47.2cm